

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02709

研究課題名(和文)ポリネシア諸語における語類の推移と曖昧性に関する対照研究

研究課題名(英文)A contrastive study on the transition and ambiguity of word classes in Polynesian languages

研究代表者

塩谷 亨 (SHIONOYA, TORU)

室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：10281867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：ポリネシア諸語における四つの形態素タイプ(自立語、小辞、接語、接辞)の区分、及び自立語に属する二つの語類(動詞、名詞)の区分に関する様々な問題について調べた。その際、同系の形態素が言語によって別の形態素タイプになっている事例、ある形態素がどの形態素タイプ或いはどの語類に属するか決めるのが困難な事例に注目した。本稿ではこれらの事例を説明するために有効な視点を提供した。更に、ポリネシア諸語に適した形態素タイプの分類とはどのようなものであるか考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本稿で示された二つの視点、すなわち、元々は複数の接語が並んで自立語に付加されていた所で、その複数の接語の機能が一つの接語に形式的に融合された場合があるとする視点、そして、一部の接語について、名詞句に付加されるか動詞句に付加されるかの区分に関して曖昧性を持っている場合があるとする視点、の二つの視点を用いることで、語類に関連する様々な問題を説明することができる。このような視点は、ポリネシア諸語以外の語類に関わる問題にも応用できるものと期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine various problems related to the classification of four morpheme types (words, particles, clitics, and affixes) and two word classes (verbs and nouns) in Polynesian languages. In doing so, particular focus was placed on the cases where cognate morphemes belong to different morpheme types in different languages and the cases where it is difficult to determine which morpheme type or which word class a certain morpheme belongs to. In order to give explanations to these cases, two effective viewpoints were provided. Moreover, the classification of morpheme types appropriate for Polynesian languages was discussed.

研究分野：言語学

キーワード：ポリネシア諸語 対照研究 語類

1. 研究開始当初の背景

(1)ポリネシア諸語は、単独で立つことが出来る自立語に様々な付属語が付加される事で文法機能や一部の副詞的機能を表示する。付属語には時制・相指標、限定詞、前置詞等々含まれるが、しばしばまとめて小辞として大分類される。また、小辞の下位区分として、動詞句を形成する動詞小辞、名詞句を形成する名詞小辞、動詞句でも名詞句でも用いられ主に副詞的な機能を有する一般小辞の三つを設けることができる。Biggs(1969)のマオリ語、Pawley(1966)のサモア語、Elbert and Pukui (1979)のハワイ語の記述など、ポリネシア諸語の先行研究では、しばしば、動詞的小辞・名詞的小辞との共起がそれぞれ名詞・動詞という語類の分類基準として用いられてきた。

(2)平成 25 年度から 28 年度までの科学研究費補助金による研究課題「ポリネシア諸語における様々な小辞の機能・用法に見られる差異について」では、小辞に着目し、ポリネシア諸語間でどのような小辞の用法についてどのような差異が見られるかについて考察した。その中で、小辞が付加される側である自立語の分類について、そして、自立語と小辞及び小辞と接辞という区分について、以下の 3 つの疑問点が浮かび上がった。

同じポリネシア諸語内で、起源を同じくする同系の形式が、言語により、自立語、小辞、接辞の区分で一致しない場合がある。例えば、ある言語で自立語であるものと同起源の形態素が別の言語では自立語ではなく小辞として機能している事例、また、ある言語では小辞とされるものと同起源の形態素が別の言語では接辞とされる事例、等がある。このような小辞・自立語・接辞という区分についてのポリネシア諸語間の不一致にはどのようなものがあり、どのような傾向が見られるのかという点である。

ポリネシア諸語では動詞類に属する単語の多くが他の動詞に付加されて副詞的な意味を表す。多くの場合その動詞の副詞的用法として分析されるが、元々の動詞の意味から逸脱している場合には、その動詞から派生した副詞的小辞として分析される場合がある。しかしながら、中には、動詞の副詞用法なのか、その動詞と同語源の副詞的小辞の用法なのか、判断が難しい場合がある。そのような場合に両者の区別をどのように捉えるべきかという点である。

小辞の中でも、名詞小辞と動詞小辞はそれぞれ名詞句、動詞句を特徴付けるものであり、Biggs(1969)、Pawley(1966)、Elbert and Pukui (1979)等では、名詞小辞や動詞小辞との共起が名詞、動詞という語類の区分の基準となっている。ポリネシア諸語では、数は多くないが、同じ形で動詞的小辞としても名詞的小辞としても機能すると考えられる事例がある。更に、ポリネシア諸語では、同じ形で動詞としても名詞としても用いられる単語が多数存在するため、名詞句か動詞句かという判断は専ら意味解釈によるしかないという場合がある。どのような場合にこうした曖昧性が生じるのか、また、そのような場合に動詞句か名詞句という区別をどのように捉えるべきかという点である。

(3)これらの疑問への答えを探究することは、すなわち、ポリネシア諸語の語類の分類基準を見直しより明確で有効な分類基準を提示することにつながると考え、本課題研究の着想に至った。

2. 研究の目的

(1)ポリネシア諸語の語類の同定に関わる以下の三つの疑問点について考察する。

ある同系の要素について、それが小辞・自立語・接辞のうちどれに分類されるかポリネシア諸語間で一致しない場合があるが、どのような場合に不一致が起こるのか示す。

ある動詞が別の動詞に付加されて副詞的な意味を表している場合、その副詞要素はその動詞の副詞的用法と分析するべきか或いはその動詞から派生した副詞的小辞の用法と分析するべきか、どう線引きをすればよいのか、考察する。

名詞句なのか動詞句なのか曖昧性が見られるのはどのような場合なのか、について考察する。

(2)上記の結果を踏まえてポリネシア諸語における語類を分類する際の諸基準とそれを設定する際の原理を提示する。

3. 研究の方法

(1)国内大学図書館及び仏領ポリネシアと米国ハワイ州にて、ポリネシア諸言語の先行研究及び各種言語テキストを含む、文献・言語資料を収集する。

(2)ポリネシア諸語の先行研究における語類に関連する記述を収集し整理統合する。

(3)ポリネシア諸語の中からサモア語、ハワイ語、タヒチ語について、語類の同定に際して問題となる以下の三つの事例について、該当する用例を抽出し分析し、それぞれどのような傾向がみられるのかを示す。

同語源の語について三言語間で小辞・自立語・接辞の区別に不一致がある事例について分析する。

各言語で動詞の副詞的用法なのか動詞から派生した副詞的小辞なのか問題となる事例について分析する。

各言語で名詞句と動詞句の区別に曖昧性がある事例について分析する。

(4)上記の結果を踏まえて、ポリネシア諸語の語類の分類基準及び基準を立てる上での原理を提示する。

4. 研究成果

(1) ポリネシア諸語を含む語族であるオーストロネシア語族の言語である Tabá 語について Bowden (2001) が示した、自立語、小辞、接語、接辞の四つの区分及びその基準がポリネシア諸語にうまく適用できるかどうかを考察した。そこには形態統語論的独立性と音韻論的独立性という二つの基準が含まれており、音韻論的独立性を持つのが自立語と小辞、形態統語論的独立性を持つのが自立語と接語となっている。音韻論的独立性は、主強勢を担うことができるかどうかで基準となるが、ハワイ語、サモア語、タヒチ語等多くのポリネシア諸語では、主強勢は音節の数と句中の位置で決まり、句の中で後ろから2番目の音節又は、句の末尾の長母音を含む音節が担う。その結果として、短い1音節からなる形態素、自立語の前に付加される形態素は、自動的に、音韻論的独立性を持たないことになるため、接語か接辞のいずれかに分類されることになる。一方、自立語の後ろに付加される形態素については、2音節又は長い母音を含む1音節からなる形態素は小辞、それ以外は接語または接辞に分類されることになる。

(2) 同語源の形態素で、ハワイ語、サモア語、タヒチ語の間で小辞、接語、接辞の区別について、不一致が生じている事例として、数詞句の冒頭に現れる諸要素と受動態或いは能格動詞の指標とされる要素を取り上げ、その音韻・形態・統語的特性を比較し、三つの言語の間の類似点と相違点について考察した。その結果として、以下のようなことが明らかとなった。

数詞句の冒頭に現れる形態素について、サモア語のものはより接語的、ハワイ語のものはより接辞的、タヒチ語のものはその中間的な特徴を持っている。

受動態或いは能格動詞の指標とされる形態素について、サモア語のものはより接辞的、ハワイ語およびタヒチ語のものはより小辞的な特徴を持っている。

これらのことから、上記の形態素について、元々同じものであったものの特性に偏移が生じたことが示唆された。

(3) 動詞の後置修飾要素について、それが自立語と小辞とどちらに分類されるのかについて考察した。

ハワイ語の用例データを分析・比較した。その結果、動詞の副詞的用法とみなせる事例、動詞の副詞的用法とはみなせずむしろ独立した動詞修飾語として特化した語類とみなせる事例、及びその中間に位置する事例があり、最も自立語的なものと最も小辞的なもの、その間に位置する中間段階2つの、合計四段階からなる連続体としてとらえられることを示した。

サモア語とタヒチ語の同様の事例についてもハワイ語と併せて対照した。その結果、ある言語では自立語的である形態素が別の言語では小辞的であるという事例が見られた。ここでも、上記(2)と同様、元々同じものであった形態素の特性に歴史的な推移が生じたことが示唆された。また、この分析の過程で、動詞修飾要素と名詞修飾要素とは特徴的に重なる部分が多くあることが分かった。

(4) 動詞句であるか名詞句であるかの区別が曖昧になっているような事例について、どのような場合に曖昧が生じるのか、また、そのような曖昧性を扱うためにはどのような分析が有用であるのかを考察した。

ハワイ語の二つの後接語 i と he の事例を用いて、曖昧性が生じる条件となる二つの要因として、後接語が一つしか付加されていないこと、その後接語が名詞後接語と動詞後接語という二つの機能を持つこと、を示した。また、ハワイ語の he に対応するタヒチ語の後接語 e についても同様に分析できることを示した。

上記のいずれの場合でも、このような曖昧性は、過去に起こったと思われる後接語の機能の統合或いは拡張のような歴史的な推移が原因として説明されるとの仮説が示された。

(5)上記の(2)、(3)、(4)の結果を受けて、語類分類基準設定の上で考慮すべきいくつかの事実が明らかとなった。

同じ言語のある形態素が同じ形式で接語と接辞の両方に該当する振る舞いをする事例と、歴史的には一つの形態素の異形態と考えられるものが片方は接語、もう片方は接辞として振る舞う事例があることを指摘した。

一部の言語で、動詞に付加される副詞用法の動詞あるいは副詞的接語として分析してきたものの少なくとも一部について、動詞連続(serial verb)として分析される可能性を指摘した。

動詞を述語とする文については、その基本構造と動詞に付加される後接語の機能に関して、通時的にも共時的にも比較的安定しているのに対し、名詞を述語とする文については、その基本構造と名詞に付加される後接語の機能に関して、通時的にも共時的にも顕著な推移が見られることを指摘した。

(6)上記すべての分析研究の成果を踏まえて、ポリネシア諸語の語類の分類基準と原理についての以下のような結論に至った。

接語や小辞の中でも特に自立語に前置される接語が動詞句と名詞句という機能的区分に直接反映することに着目し、1)前置される複数の接語の機能の形式的融合、2)前置される接語の一部にみられる機能的曖昧性という二つの視点により、より効果的な語類の分類基準と原理が導かれるという結論に達した。多くのポリネシア諸語に共通の特徴としては、自立語に付加される小辞や接語の辞順が固定されているということがあるが、1)の視点を用いて、一部の前置される接語については隣接する接語の機能が一つの形式に融合されたという歴史的推移を想定することにより、一見複雑な接語の振る舞いが体系的に説明される。2)の視点は、自立語に前置される接語の多くについては、動詞句または名詞句の片方の機能とのみ結びついているが、その区分が曖昧な接語が一部存在しており、それらの接語の機能的曖昧性を想定することにより、動詞句と名詞句の区分の曖昧性を説明するものである。

これまで(1)で述べた Bowden (2001) による自立語、小辞、接語、接辞の四つの区分に沿った分析をしていたが、その中の、特に小辞と接語・接辞を区分する基準である音韻論的独立性について、ポリネシア諸語への適用には効果的でないと思われる点が浮かび上がった。音韻論的独立性は主強勢を担うことができるかどうかが基準となるが、ハワイ語、サモア語、タヒチ語等多くのポリネシア諸語では、主強勢は音節の長さや句中の位置で決まる。その結果として、統語的に同じ位置に現れ相補分布をなし意味的・機能的にも対応している形態素が音節の数だけで違う分類になるということが生じる。また、主強勢は句内の後ろから2番目の音節又は長母音を含む末尾音節が担うため、自立語の前に付加される諸要素は自動的に音韻論的独立性を持たないことになる。自立語以外の形態素の分類については小辞か接語・接辞かの区分は音節の数或いは自立語の前と後ろどちらに付加されるかで自動的に決まることを考えると、小辞という範疇はハワイ語、サモア語、タヒチ語等多くのポリネシア諸語では不要であり、自立語、接語、接辞の三つの区分とするのが形態素の分類としては有益と考えられる。

< 引用文献 >

Biggs, Bruce. 1969. Let 's learn Maori. Auckland: Reed.

Bowden, John. 2001. Taba: description of a South Halmahera language. Canberra: The Australian National University.

Elbert, Samuel H. and Mary. K. Pukui. 1979. Hawaiian grammar. Honolulu: University of Hawaii Press.

Pawley, Andrew. 1966. Samoan phrase structure. Anthropological linguistics. Vol 8, no 5.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 塩谷亨	4. 巻 19
2. 論文標題 サモア語、タヒチ語、ハワイ語の文頭句について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道言語文化研究	6. 最初と最後の頁 117-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塩谷亨	4. 巻 18
2. 論文標題 ハワイ語における名詞句と動詞句の区分に関わる曖昧性について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道言語文化研究	6. 最初と最後の頁 91-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塩谷亨	4. 巻 68
2. 論文標題 サモア語、タヒチ語、ハワイ語における接語と接辞の区分について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 室蘭工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塩谷亨	4. 巻 17
2. 論文標題 サモア語、タヒチ語、ハワイ語の動詞後置形態素ina、hia、'iaの現れ方について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道言語文化研究	6. 最初と最後の頁 127-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塩谷亨	4. 巻 1
2. 論文標題 ハワイ語の数量詞句	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 151-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩谷亨	4. 巻 16
2. 論文標題 サモア語、タヒチ語、ハワイ語における不定名詞句の現れ方について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道言語文化研究	6. 最初と最後の頁 49-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 塩谷亨
2. 発表標題 ポリネシア諸語の基本的な句構造の比較及び形態素の分類について
3. 学会等名 北海道言語研究会第20回研究例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩谷亨
2. 発表標題 ハワイ語における名詞句と動詞句の区別の曖昧性について
3. 学会等名 北海道言語研究会第18回研究例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩谷亨
2. 発表標題 タヒチ語の不定冠詞と未完了相指標について
3. 学会等名 北海道言語研究会第19回研究例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩谷亨
2. 発表標題 ハワイ語における動詞修飾要素の区分について
3. 学会等名 北海道言語研究会第16回研究例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塩谷亨
2. 発表標題 サモア語、タヒチ語、ハワイ語における副詞語類について
3. 学会等名 北海道言語研究会第17回研究例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩谷亨
2. 発表標題 ポリネシア諸語における語・接語・接辞の区別について
3. 学会等名 北海道言語研究会第14回研究例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 塩谷亨
2. 発表標題 ポリネシア諸語の接辞と接語の区別について
3. 学会等名 北海道言語研究会第15回研究例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関